

さまざま合衆国の民主主義

株式会社日本総合研究所 上席理事 呉 軍華

「America is back」というバイデン大統領の宣告の声がアメリカの内外で響き渡るなか、徐々にワシントンに行ってきた。アメリカが果たして大統領の目指すところに戻ることができるのか。現時点で結論を出すのは無論、時期尚早だ。しかし、バイデン政権の発足を機に、アメリカ社会の在り方が大きく変わろうとしているのは確かかのようだ

今回の訪問でもっとも印象的なのは、目下のワシントン界隈でどこかの軍事国家を彷彿させる物々しい厳戒体制が敷かれていることだ。法的に義務づけられているわけではないが、念のため、現地到着後 PCR 検査会場が設けられているワシントンから 30 キロ以上離れたメリーランド州のある市民集会所に直行した。吹雪の中、ナビゲートに頼ってやっと辿り着いたが、間違っ軍の施設に案内したのではないかと一瞬疑った。不測の事態に備えるためかもしれないが、検査スタッフの人数を上回るほど多くの軍人が建物の内外に群がっていたからだ。

ワシントン市内の警戒体制は無論、一層厳しい。大統領就任式から 1 カ月以上経ったにもかかわらず、連邦議会議事堂やホワイトハウス、最高裁判所といった要所要所に張り巡らせたバリケードがそのまま残っており、有刺鉄線付きのフェンスが今もそびえ立っている。かつて世話になったシンクタンクなどを訪ねようとしても、幾度もの警備チェックを通過しなければならないほどであった。

それほどの体制を敷く理由は自国民、なかでもトランプ前大統領の支持者による反乱・暴動に備えるためのようだ。ちなみに、就任演説において、バイデン大統領は「Uncivil War」という言葉を使って激しく分断されているアメリカ社会の現状を表した。改めて強調するまでもないが、これは日本を含む多くの国々で南北戦争と訳され、奴隷制の存続を巡って 19 世紀半ばのアメリカで勃発した彼の「The Civil War (内戦)」を連想させる表現であった。

もっとも、「civil」には「文明的、市民的」の意味もある。バイデン大統領は反トランプとトランプ支持のように極端に分裂されている今のアメリカが南北戦争に準じる内戦状態に陥っているとの判断から「Uncivil War」を使ったのか。それとも、双方の対立の在り方が粗野であり、非文明的だとの認識を持っているのか。さらには、対立が深刻でもなお「The Civil War」、つまり内戦の状態までには至っていないという認識を表したいのか。定かではない。しかし、第一と第二のシナリオの場合、つまり、対立の相手を戦うべく敵としたり、粗野でありまとめないと見下ろしたりするようでは、バイデン政権の最大の選挙公約であった社会の融和が果たして進むのかと、筆者は疑問に思う。

折しも、トランプ前大統領とその支持者の声がほぼすべてのメディアに封じられる状況がなお続いている。このままでは、異議を訴える権利等が保障される共和制も民主主義も形骸化するのではないか。民主主義退潮の波がついに自由・民主主義の守護神であるはずのアメリカにまで押し迫ってきたのか。いずれも単なる筆者の杞憂であってほしいと、切に願う。

(2021.3.22)